手作りの点滴セット

No. 11

点滴セット

**看護用品の解説**

手作りの静脈内輸液や大量皮下注射用の輸液セット。ボトル用針，ガラス管，タコ管，針，ゴム管の接続部をそれぞれ絹糸で結んでセットにし，管がからまないよう台紙に置いて包布で包み，オートクレーブで滅菌して使用した。注射針は砥石で先端を鋭利にした。磨いだ後，針先をガーゼにこすり，引っかからないと‘良’であると判断した。これらのセットは 1960 年頃から使っていない。

**看護用品にまつわるエピソード**

点滴セットは，中央材料室で作成・滅菌し，病棟に届けられて使用された。使用後は中央材料室に戻され，そこで部品ごとに分解して洗浄した。せっけんで洗い，水で洗浄した後，蒸留水を通し，その後アルコールを通して乾燥させてから滅菌した。アルコールを通すので作業をしていると指がしわだらけになった。針先は研石で磨いで，ガーゼに当てて手前に引いて引っかかりがないかを確認した。細心の注意を払って磨き引いた時には引っかかりはなくても，刺入する時に抵抗がある場合もあり，使いたくなかった。点滴静脈内注射の普及前の大量輸液は，大腿部への皮下注射が行われていた。大量皮下注射は痛みを伴うので，両側の大腿部に太い針を刺して輸液をしている患者を見るのはとてもつらかった。

ゴム管は駆血帯に使っていたものと同じもので，必要な長さに切って使った。チューブのつなぎ目は手術室で残った絹糸を使った。出来上がったセットは絡まないように台紙に乗せて滅菌した。当時中部病院ではカルテの表紙が大量に廃棄され，それを当時の看護部長のアイディアで台紙として利用した。セットを洗浄，滅菌して何度も使っているうちに，チューブがくっついていった。特に，未使用のまま期限切れになったセットを開かずに再度滅菌すると，チューブ同士や台紙とくっついてしまうことがあった。使う前にはくっついた部分を押してとおりをよくして薬液の流れを確認した。ゴム管は何度か使うと劣化するので，再セットする時にはチェックし悪くなったものは除去した。タコ管など，血液がこびりついて取れないものは捨てた。実際に使用している時にセットの不備のために液が漏れたりしたという話は聞いたことがなかった。

手作りの点滴セットは 1966 年に中部病院に移転し，二プロの製品が入ってきた頃には使われなくなった。

（備瀬信子氏他，2004）

**解説**

現在，点滴セットは感染予防と体内への異物混入の予防という観点から厳密な規制のもとで製品化されている。病院で使い捨ての輸液セットを購入するようになるまでは，輸液セットの作成から滅菌までを医療施設内で行い，その役割を看護職者が担っていた。作業時の看護者の意識から，安全という観点からの観察と患者の負担を最小にするよう細心の注意を払って作業をしていたことが伺える。（嘉手苅英子，2004）